

わたしを支えた一言・一節

われ以外、みな我が師。品格がある芸を 目指す。

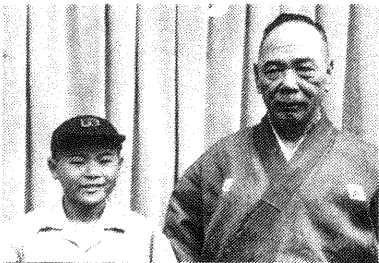
あずまや・つらたろつ 東家浦太郎

声、節、啖呵ともによし。二代目・東家浦太郎は次代の浪曲界の中心的存在だ。太田英夫から二代目・浦太郎を襲名して四年五か月。浦太郎の名前はすっかり定着した。

「初代の十八番を意識する余り『野狐三次』にこだわった時期もありました。今は自然体を心がけています」
浦太郎の師匠は野口甫堂(どう)のペンネームで数多くの浪曲を書いた寄席打ちの名人、東家楽浦(らくうら)。
浦太郎が弟子入りしたのは一二歳。



昭和三十五年、十八歳。甘いルックスのプロマイド。「当時は浪曲の前座がたくさんいました。早く国際劇場の浪曲大会の前座を務めたいと修行しました」



入門当時の師匠・楽浦と浦清(入門時の芸名)少年。「師匠は飄々とした人生の達人でした」。初代・浦太郎は兄弟子にあたる。

「師匠・楽浦は今の自分と同じ五十六、七歳でした。師匠には話芸や演芸だけでなく世の中の様々なことを広く浅くでも経験しろと教えられました。あとで芸として実を結ぶからとね」

それならばと浦太郎が「なんでもいなら泥棒してもいいの」と問うと師匠はあわてず騒がず「いいとも。プタ箱に入るのもいい勉強だ」と言った。
芸にいきづまったとき、名曲師の松下信太郎のもとで稽古を積んだ。
「松下さんは三味線だけでなく、食

道楽でいろいろな芝居をみていて絵がわかって花を愛していました。人生を幅広く見る目が養われました。松下さんが言った「人間は努力をしてまじめにやれば、お天道さまは飯を食わせてくれる」が私を支えています」
浦太郎が好きな言葉は努力と根性だ。

「私は古い人間のせいとか、額に汗してがんばることが好きなんです。むしろ、舞台ではそんな態度は見せませんよ。親が死んでも舞台を勤めなくてはならない仕事ですからね」

明るく華やかな舞台、徹底したサーブス精神、声や調子の良さ。「多けりやいいつてもんじやないんですよ」と謙遜するがネタ数の多さで浦太郎の右にでるものはいない。東京・金町の島村会館での「浦太郎の会」は毎月一回、開催して十七年、二百回を越えて。偉業といっている。

「会も浪曲のネタも、ひとつひとつの積み重ねが大事です。私のネタに「上杉鷹山」があり、鷹山公の「なせばなるなさねばならね何事もなさぬは人のなさぬなりけり」が座右の銘です」



昭和五十七年。浪曲協会野球チームを作りサードを守っていた。初代・浦太郎、三代目・広沢虎造の顔も見える。

浦太郎は日本浪曲協会の副会長としての重責も担っている。

「今度、三回目の三味線教室を開設し、担当になります。ここから前途有望な曲師を育てた実績があります。私たちが講談の田辺一鶴師匠のように弟子をスカウトする努力や積極性が必要です。後輩をしっかりと育てて浪曲という文化を発展をさせる使命感を覚えます」
品格のある芸が一義と考える浦太郎は来年が芸能生活四十五周年になる。独演会やリサイタル、新曲発表の予定が目白押しだ。浪曲界の明日のために浦太郎は東奔西走している。

(おさだ)

2/52